

■ 卷 頭 言 ■

## 環 境 と 健 康

福岡県保健環境研究所長 吉村 健清



人類は数千年の間、自然の中で自然と共存しながら自然の恵みの中で生きてきた。一方では自然の脅威にさらされながら生きてきたといってもよい。すなわち、それぞれの多様な環境に住む人類が、その土地のどんな環境が自分たちに生を与えてくれるのか、またその土地のどんな環境が自分たちに破壊を与えるのかを、長い歴史の中で知り、知恵を授かって生きてきたのである。

ところが産業革命以後、人類の生活は大きく変化した。鉱工業の発達により、自然依存の生活から新しいエネルギー依存の生活へと転換した。石炭、石油エネルギーの出現は、これまでほとんど手つかずといった自然界のあちこちに人間が入り込むきっかけになった。このエネルギーを求めた人間活動、このエネルギーを使用した人間活動の自然に対する介入が、現在の地域の環境変化、地球規模の環境変化をもたらしているのである。もちろん地球の数千年、数万年に及ぶ自然界の変化もあるが、人為的な介入はここ二百年とくに最近の百年、指数関数的に激増し、その変化に自然界が対応できない状態になってきている。

これが環境問題としてとりあげられるようになったのは、ここ数十年のことである。人類は、それぞれの地域の持つ自然との共存の知恵を打ち捨て、人の生活のためだけの富や利便性に走るようになり、自然生態系の変化にあまりにも無頓着であった。やっと世界中がこのことに気づき、環境問題に積極的に取り組むようになった。この意味で、環境問題を地域から取り組む機関として、環境研究所の役割は大きいものがあると考ええる。

一方、環境問題は人間の健康に大きな影響を与えていることを忘れてはならない。足尾銅山の鉍

毒事件を始めとし、戦後の公害問題はあまりにも多くの人に健康被害を及ぼしてきたことは周知のことである。工業化による大気汚染や水質汚染についてはこれまで多くの研究がなされ、その対策について大きな進歩が見られている。これらの経験によって得られた教訓や研究の成果は、これから工業化を進め、産業振興をめざしている途上国で、健康被害を防ぐためにぜひ生かされなければならない。

このような健康被害は工業化だけで起こるものではないことが、最近のバングラディシュ、インド、ベトナム、中国内モンゴル地方の井戸水ヒ素汚染の問題からも分かる。何千万人という住民がヒ素に汚染されている井戸水を飲料水として用い、その一部は慢性ヒ素中毒症になっており、皮膚がんなどの危険にも直面している。また、昨年はヨーロッパで、1万5,000人の人が異常熱波により死亡したことも驚きである。

さらに忘れてならないのは、物理的な影響や化学的な物質の健康影響だけでなく、最近では、生物系の変化が人間に脅威を及ぼしていることである。最近のSARS、鳥インフルエンザ事件はその典型であろう。細菌、ウイルスなどの微生物は、その性質を刻々と変え、時として人間に重大な健康危害を与える新興感染症の問題を引き起こす。また物理的地球環境の変化によって、感染症の媒介昆虫の生態に大きな変化が生じ、再興感染症が課題となっている。以上の例から見られるように、これからの環境問題は、物理的、化学的環境の問題に加え、生物学的環境問題が重要になると考える。

(よしむら たけすみ)